

2012年度博士学位論文（要旨）

入院中の幼児を対象とした遊びの検討
—看護師による援助の現状と課題—

桜美林大学大学院 国際学研究科 環太平洋地域文化専攻

高橋 亮

目 次

第1章 序論	1
第1節 幼児期の子どもにおける遊びの意義について	1
第2節 入院児が抱える問題	4
第3節 入院児を取り巻く環境と遊び	7
第4節 入院児への遊びの効果	12
第5節 入院児への遊びの援助に関する看護師の考え方	18
第6節 病院における入院児への遊びの援助の専門家	27
第7節 小児看護における遊びの研究の傾向と看護教育の実態	33
第2章 本研究の目的と構成	36
第1節 本研究の目的	36
第2節 本研究の構成	38
第3章 入院児に対して行われている遊びの援助の現状	40
【研究1】 看護師による入院児への遊びの援助の状況	40
第1節 目的	40
第2節 方法	40
第3節 結果	42
第4節 考察	44
【研究2】 看護師の入院児への遊びの援助の具体的内容と考え方	51
第1節 目的	51
第2節 方法	51
第3節 結果	54
第4節 考察	55
第4章 入院児に対する遊びを用いた援助の実際の検討	64
【研究3】 入院児に対する遊びを用いた援助の実際の検討	64
第1節 目的	64
第2節 方法	64
第3節 結果および考察	68

第5章	看護学生による入院児への遊びの援助の着想についての検証	89
	【研究4】看護学生・保育学生・作業療法学生における「牽引療法中」の入院児への遊びに対する着想の比較	89
第1節	目的	89
第2節	方法	91
第3節	結果	93
第4節	考察	97
	【研究5】看護学生の「点滴療法中」の入院児への遊びの着想に関する検討	108
第1節	目的	108
第2節	方法	109
第3節	結果	111
第4節	考察	116
	【研究6】看護学生の「制限がない」入院児への遊びの着想に関する検討	126
第1節	目的	126
第2節	方法	126
第3節	結果	128
第4節	考察	133
第6章	総合考察	143
第1節	本研究の結果の要約	143
第2節	看護師による入院児への遊びの援助促進への考察と提言	145
第3節	本研究の限界と今後の課題	150
第4節	結論	151
引用文献		153
謝辞		161
資料		

要 旨

第 1 章 序論

子どもにとって遊びとは、生活において大きな役割を果たすものである。とくに幼児期においては、子どもの生活は遊びという活動と一体的な関係にあり、遊びが生活そのものであるともいわれている（長谷川, 1980; 木野, 2004; 及川, 2004）。幼児期の遊びの基本的意義はその全面発達性にあり「身体的発達の側面」、「知的発達 of 側面」、「社会的発達の側面」、「心理的発達・解放の側面」の 4 つの視点で遊びが発達の土台となっているともいわれている（山田, 1994）。ここでいう「心理的発達・解放の側面」というのは、子どもにとっての自由な遊びは緊張状態から解放され、心を開かせるという意味につながる考え方である。さらに、山田（1994）は、遊びの本質を「遊びになる」ことととらえ、主体の意識や心理の揺れ動くままに「遊びになったり」、「ならなかったり」するものであり、「遊びになる」ためには以下の 3 つの条件があると述べている。第 1 の条件は「その活動がその活動の主体にとって楽しいこと」であること、第 2 の条件は「主体にとってはその楽しい活動自体が目的であって、少なくともその活動がその外部にある他の目的手段のための単なる手段となっていないこと」、第 3 の条件は「外部から強制され拘束されているという感じを主体が持たないこと」である（山田, 1994）。しかし、病気や怪我により、何らかの制限を強いられて自由に生活することができないような子どもでも、このような条件を満たすような遊びを主体的に行うことが保障されているであろうか。

本研究では、入院している幼児期にある子ども（以降、入院児とする）を対象とした研究を行う。医学および看護学では治療への心理的準備として「遊び」を用いた援助である「プレパレーション」や心理療法の 1 つとして「遊戯療法」という言葉が用いられているが、遊びの本質である遊びの活動そのものが目的であり、入院児の主体によるものであるということを前提にしながら論議を進めていく必要がある。そうでなければ、治療の効果を優先し過ぎてしまい、遊びの本来の目的を失いかねない。遊び本来の目的を逸すれば、それはすなわち子どもの利益を逸することになる。本研究では、入院児の遊びを「遊び」本来の目的を見失わず、且つ「入院児」の目的である治療を目的に据えながら、これから看護師による入院児の遊びについて考究していきたい。

入院児は自宅という馴染みのある環境から馴染みのない環境におかれ、同時に身体の内側では病気そのものから起こる不快や苦痛や痛み、身体抑制あるいは治療、手術や検査などの苦痛を伴うストレスの強い状況下で生活を送っている（Bossier, 1994; 廣末, 1999; Hockenberry, Wilson & Winkelstein, 2005）。とくに、幼児期にある子どもにとって入院するというような状況に置かれることは、生活そのものである遊びに大きな影響を与えることとなる。入院児にとって、遊びは不可欠なものであり、遊ぶことは権利として保証されるべきである。そして、入院児への遊びの援助は、様々な心理的な不安に対して効果的な関わりであるといわれている（Haiat, Bar, & Shochat, 2003; Sylva, 1993）。現在のわが

国では、入院児の遊びの環境づくりは各医療機関の判断に任せており、その中心的役割を担っているのは看護師であるため、遊びに対する看護師の考え方が医療の場での遊び環境を左右しているともいわれている（中村ら、2000）。しかし、実際の病棟では多忙などの理由から、入院児への遊びの援助の重要性は高まっているものの、看護師による遊びの援助はまだ十分とはいえない。また、看護師が遊びの援助を行ったとしても、その援助が必ずしも入院児にとって有益なものになるとは限らない。入院という不安や恐怖、病気や治療による苦痛といったストレスを和らげるためにも、病状の許す限り身体を動かして入院児が少しでも楽しく入院生活を送ることができるような、効果的な遊びを用いた援助が求められる。しかしながら、看護師による遊びの場面は処置の最中が多かったり、遊びの役割については発達面を主に注目していたりと、遊びの援助が必ずしも心理面、すなわち入院や治療に関する心理的ストレスの緩和が目的となっていない。さらに、看護師経験が浅い看護師に遊びの果たす役割の意識が薄いという現状もある。

近年の少子化の影響で入院する小児の減少により、「小児（科）病棟」が閉鎖され成人との「混合病棟」に統合されるケースが多いことから、子どもの入院環境の悪化が懸念されている。このような状況においても、これまでと変わらず遊びの援助は十分に行われているのかといった危惧もされている（帆足, 2009; 飯村, 2009）。日々の病棟の激務や成人患者中心の混合病棟の看護体制の中で、遊びの援助が蔑ろにされる恐れもあると推測される。現代の少子化は、入院児を取り巻く環境への影響だけでなく、これから小児医療を担うであろう若者にも、子どもとの関わり希薄化という形で影響を与えていると考えられる。それが、実際に若い世代の看護師、および看護学生の遊びへの考え方にも影響を与える可能性がある。

入院児自身が喜びや楽しさを実感して入院生活を送ることができるような遊びの援助、さらには心身ともに制限を強いられている子どもに対して遊びの援助を通して、子どもの遊ぶ力を引き出し病気や怪我の治癒に向かう力を引き出していくのも小児病棟の看護師の役割である。そのためには、看護師が入院児にとっての遊びの果たす役割や効果についての考えを持つことが肝要である。遊びを通じて入院児を支えることができるのは、チャイルド・ライフ・スペシャリストの定着をみないわが国では、看護師がその役割を担うことになる。よって、看護師が子どもの遊びについての考えを強く持つことは非常に重要である。今後、入院児の QOL (Quality of Life) の改善という点で、さらに遊びの必要性が問われてくると予測され、具体的な看護援助の導入の方策を検討することが求められる。本研究によって得られる知見によって、入院という困難な状況に置かれている子どもたちの QOL 向上に貢献できると考えられる。あわせて、入院児は治療している最中でも絶えず成長・発達をしており、入院中には子ども特有の問題も生じる可能性もあることから、医学や看護学といった医療関連の領域だけでなく発達や心理、教育といった「学際的」な視点から入院児への援助について提言する。なお、本研究では、主として幼児期の子どもにおける遊びに焦点を当てているが、その理由は幼児にとって遊びが必要不可欠なものである

と同時に、いかなる場合、たとえば病に伏せているような状態においても子どもの遊びが保障されなくてはならないという考えが筆者の根底にあるからである。

第2章 本研究の目的と構成

本研究では、入院児に対して行われている看護師の遊びの援助の現状を明らかにし、より効果的な遊びの援助が行われるように検討することを目的とした。

本研究は6章で構成されている。第1章の序論では先行研究を踏まえて、看護師の入院児への遊びに関する事柄を述べた。第2章では、本研究の目的と意義、そして構成を述べた。第3章では入院児に対して行われている遊びの援助の現状について論じた。具体的には看護師が入院児に行っている遊びの援助の現状と考え方についての調査結果を述べた。第4章では入院児に対する遊びを用いた援助の実際の検討をするために実践的な調査を行った。第5章では看護学生による入院児への遊びの援助の着想についての検証を論じるために、看護学生を対象にした調査をいくつか展開した。看護学生の入院児への遊びの援助の考え方を明らかにするために、いくつかの入院児の事例を設定し遊びの着想内容を回答として求め、看護学生の考え方を多角的に検証した。第6章では、「総合考察」として、本研究の結果の要約および看護師による入院児への遊びの援助促進について看護教育への提言も含めて述べた。加えて、本研究の限界と今後の課題を述べた。

第3章 入院児に対して行われている遊びの援助の現状

【研究1】 看護師による入院児への遊びの援助の状況

本研究では、小児病棟看護師と小児・成人混合病棟看護師が入院児に対する遊びの援助を日々の看護活動の中でどのように行っているかを明らかにした。入院児への遊びの援助の実施状況は小児病棟看護師群の方が有意に多く、混合病棟では遊びの援助が少ないという現状があることがわかった。この結果の背景には、混合病棟の看護師は、入院児への遊びの援助は母親（家族）が行うものであるという認識を持っているということが影響していた。加えて、成人患者中心の看護業務体制であることによって、小児患者への遊びの援助を行うことができない、または想起できないという状況にあることも明らかとなった。

【研究2】 看護師の入院児への遊びの援助の具体的内容と考え方

本研究では、看護師が普段行っている遊びの具体的な内容を明らかにすることと同時に、さらに行ってみたいと思う遊びやその遊びが入院児にとってどのような効果があると思っているかなどの考え方と併せて検討することで、入院児に対して行われている遊びを多角的にかつ総合的に考察した。看護師が入院児に対して実際に行っている遊びは、簡便でベッド上でもできる遊びが多かった。看護師が入院児に対して行いたいと思う遊びは、入院児の発達促進やストレス解消するという視点ではなく、現実的に実施が可能であるかという点から着想されていることが明らかになった。

第4章 入院児に対する遊びを用いた援助の実際の検討

【研究3】入院児に対する遊びを用いた援助の実際の検討

本研究では、看護師が実際に入院児に遊びの援助を行い、援助者である看護師の考えと入院児および家族（養育者）の反応を計13事例から考察した。遊びの援助の実際では、児の好みに合った遊びは児の反応が良く効果も高いことが明らかとなった。加えて、看護師が児と一緒に遊ぶことで得られる効果が高いことがわかった。また、児の好みや家族の希望は看護師の遊びの選定理由にはならず、看護師は自分の判断で遊びを選ぶ傾向があることがわかった。さらに、「発達段階」や「児の状況」に合わせた遊びが選定されており、児の個別性や自発性などの要素を踏まえての遊びの選定があまりされていないということも明らかとなった。さらに、＜ボール遊び＞といった動的な遊びより、＜お絵かき＞や＜塗り絵＞、＜パズル＞といった静的な遊びの選定が多かった。

第5章 看護学生による入院児への遊びの援助の着想についての検証

【研究4】看護学生・保育学生・作業療法学生における「牽引療法中」の入院児への遊びに対する着想の比較

【研究5】看護学生の「点滴療法中」の入院児への遊びの着想に関する検討

【研究6】看護学生の「制限がない」入院児への遊びの着想に関する検討

研究4・5・6では、看護学生による入院児への遊びの援助の着想についての検証を行った。研究4では「牽引療法中の入院児」を事例として、看護学生の遊びの着想内容について保育学生と作業療法学生の回答内容と比較しながら考察した。その結果を踏まえて、研究5では「持続点滴療法中の入院児」の事例に対する遊びの着想、研究6では「制限がない入院児」の事例に対する遊びの着想について看護学生の回答内容を中心にして考察した。

看護学生が着想した遊びを入院児の状況別にみると、研究4の「牽引療法中の入院児」に対して着想された遊びの内容は、「絵本読み」をはじめとする静的な遊びが多かった。また、遊びの着想理由は「入院児との関係性を構築できる」が最も多かった。牽引療法中の本事例ではストレスを解消するような活動的な遊びが効果的であったが、看護学生が着想した遊びおよびその理由は、保育学生、作業療法学生よりも治療上の制限をより強く意識した、ベッド上できるようなおとなしい遊びの内容が多かった。

研究5の「持続点滴療法中の入院児」、研究6の「制限がない入院児」のそれぞれの事例への質問でも、看護学生が着想した遊びの内容は、「絵本読み」「お絵かき」「携帯型ゲーム機」など、研究4と同じく静的な遊びが多かった。遊びの着想理由でも同様に「入院児との関係性を構築できる」が最も多かったことから、入院児の事例の安静度を拡大、つまり自由に動くことができる状態であっても遊びの内容および遊び選定の理由に変わりはない。また、研究5と研究6では、看護学生と入院児との関係性の影響に着目し、児の受け持ち期間を＜受け持ち2日目＞と＜受け持ち4日目＞の2つ時期を新たに設定したが、

研究 5 の「持続点滴療法中の入院児」の事例では、＜受け持ち 4 日目＞でも遊びの着想の傾向に変わりはない。しかし、研究 6 の「制限がない入院児」の事例では、＜受け持ち 4 日目＞の遊びの着想理由ではこれまで最も回答が多かった「入院児との関係性を構築できる」が最下位になり、「入院児の安静度を考慮した」、「入院児の身体的効果を目的にした」という内容が多くなった。つまり、看護学生は治療上制限がない入院児で、自分と児との関係性がある程度構築された時期であれば、児の安静度や身体的効果といった観点から活動的な遊びを着想することができるということが明らかとなった。

第 6 章 総合考察

研究 1、研究 2 および研究 3 の看護師への調査ならびに臨床での実践的な調査で明らかになったことは、看護師による入院児への遊びの援助は決して十分に、且つ効果的に行われていないということである。看護師が十分に遊びの援助を行うことができない理由として、病院の環境面や人員不足、業務の多重化、そしてわが国の医療・社会システムなど、多岐にわたる影響要因が背景にあり、それらが複雑に重なり合っているという現実がある。しかし、根本的な問題は看護師ひとりひとりの入院児に対する「遊びの意識」の欠如が問題ではないだろうか。病院における遊びと聞くと、わが国ではレジャー的要素をイメージする人が多いという指摘がある（松平, 2010）。たしかに、これまで述べてきたそれぞれの研究でも、入院児にとっての遊びの援助の優先度は決して高くはないことが見てとれる。しかし、遊びには本質的な価値が含まれており、子どもには「遊ぶ」という本能がある。これは、本論文の冒頭で述べた「遊び研究」の先駆者達が述べてきたことである。入院児、つまり「子ども」を看護の対象とする看護師には、改めて「遊び」の本質的な意義についてしっかり理解することが必要である。最近の小児看護学における「遊び研究」の内容では、治療や検査などの前に行われる「プレパレーション（心的準備）」に用いる遊びに関するものが多く、以前は看護ケアや処置を効果的に行うために導入する遊びの実践という内容に注目が集まっていた。入院児に対して、日々の遊びを十分に行わずして、果たして「プレパレーション」や「遊びを取り入れたケア」が果たして児にうまく受けて入れてもらえるであろうか。入院児には療養生活の中に日ごろから十分に楽しく、安心して遊べる環境が日常的に存在するという環境があって、その上で遊びを医療や看護に取り入れていくべきである。看護師が入院児の心理的な援助として、検査や処置の前に「プレパレーション」を行うことはとても重要なことである。しかし、欧米のように「チャイルド・ライフ・スペシャリスト」の定着をみないわが国においては、看護師がケアや処置を行うと同時に、子どもの生活を守り、心理的な支えになる存在でもあることから、遊びの根本的な意味を常に意識しながら入院児に関わっていく必要がある。

小児病棟において、看護師による「遊び」を単に行えばいいのかという短絡的な援助では効果が得られないことも本研究の遊びの援助の実施調査（研究 3）で明らかとなった。「遊び」はそれぞれに、その遊びでしか体験できない効果がある。しかも、提供しさえすれば

それらの効果が得られるという単純なものではない。看護師が遊びの援助を行うということは、子どもたちが遊びの導入から取り組む過程、そして最後にどのようなことになるかまで考えて援助する必要がある。それには、遊びの本質的な意義を踏まえた、子どもへの強い遊びの意識が必要である。そして、この「意識」を看護師が身につけるためには、やはり看護基礎教育における「遊び」に関する教育を行うことが必要であると考えられる。

本論文の後半に位置する研究 4・5・6 では、看護学生の遊びの着想について論じている。研究 4 の〈牽引療法中〉という入院児の状況下から、研究 5 の〈持続点滴療法中〉、さらには研究 6 の〈治療上の制限がない〉と、看護学生に教示した入院児の事例の状況の自由度を拡大させていった。そして、最後は何ら身体制限がないという状態を設定したにもかかわらず、看護学生が着想した遊びは、入院児との関係性を構築するためという手段として遊びを選ぶ傾向が強く、また比較的「おとなしい遊び」に分類される静的な遊びが多かった。入院児は様々なストレスを抱えており、身体的な制限が高ければ高いほどそのストレスは高いが、制限がなかったとしてもストレスは決して皆無ではない。とくに、本論文で焦点としている「幼児期」の子どもであれば、なおさら遊びが生活そのものでもあるので、遊びを通した心理的な援助を看護に取り入れる必要があり、遊びの目的およびその遊びの内容をよく考えて援助をしなければならない。しかし、入院児の状況がいかなる状態であっても、真っ先に児が抱えている問題に焦点を合わせた遊びの援助を着想するということは、看護学生にとって難しいということが明らかとなった。たしかに、看護学生の思いの中には、まずは入院児と関係性が構築できなければ、その後の児との関わりにも支障をきたし、児に必要な援助が滞ってしまうという危惧があるとも推測される。仮にある程度関係性ができたと想定しても、児の状況が「点滴をしている」というようなことがあれば、そのことに捉われてしまってなかなか積極的な遊びの着想ができにくく、「牽引療法中」というようなベッド上安静を強いられるような状況であれば、なおさら遊びの着想内容が消極的にならざるを得ない状況が明らかとなった。看護学生は、幼児期の子どもは一般的に身体を活発に動かすことを好むということを、小児の発達段階を理解する授業で学んできているが、入院児が対象となると一般的な子どもとして見るができなくなってしまう。看護学生だからこそ、自由な発想で児の思いに心を寄せて、幼児期にある子どもにとって大切な遊びの援助を考えてほしいと常々思う。現代の少子化による、子どもとの関係性構築の希薄化やコミュニケーション不足などの社会的背景から、看護学生にとって子どもとの関わりにおいて何よりも優先すべきこと、考えなくてはならないことが「子どもとの関係性構築」であることがわかった。現在の小児看護学教育では、このような背景の看護学生に、知識として前述したような「プレパレーション」のような遊びを取り入れた内容を教授している。これでは、入院児にとって真の意味での効果的な遊びの援助を行うことができる看護師は養成できないであろう。看護学生へは、まず「子ども」をよく理解してもらいような教育が必要である。単に知識の詰め込みにとどまらない、子どもともっと触れ合う体験型学習を増やすなどして、子どものあるべき姿、それはすなわち子どもにと

っての遊びは生活そのものであり、自由で活発な活動であり、本能としてもっているものであることを実感し、そのことをいつまでも忘れないで、看護師となってもその学びを持ち続けていけるような教育の機会を設ける必要があると考えられる。

看護師が日々の看護業務の中で遊びを十分に行うことができない、または遊びの優先順位が低くなってしまふ。また、看護学生においても子どもと遊ぶことに慣れていない、そして看護教員においても子どもと遊ぶことを教育内容に含めることを十分にできていないという現状に対して、最後に1つ提言するならば、まず「大人が子どもとよく遊ぶ」ことが必要ということである。子どもと共に純粋に遊ぶ。何かを目的とすることなく、また子どもだけでなく、大人も楽しむことが目的となるような遊び方をするとどうであろうか。看護師は入院児が遊びをしている中で喜ぶ姿を見るとき、きっと共に喜び笑顔になるであろう。看護師自身がその遊びの輪の中にいたならば一緒に笑顔で楽しむであろう。看護学生も同様に、実習のことを一時忘れて子どもと一緒に遊ぶことができたなら、それは子どもと共に楽しい一時になるであろう。遊びは常に社会・文化のなかに位置付けられている(本郷, 2004)。この言葉は、病院という環境でも同様である。さらに、本郷(2004)は、遊びは現実から離れたところに遊びの本質があるとも述べている。われわれ、大人たちが現実から離れて、子どもと純粋に遊ぶことの大切さを今一度考えてみる必要があるのではないだろうか。遊びとは、その本質を長い歴史の中で数々の先人達が考究してきたものであり、深い意味をもつ、捉えどころのないものであると表現できよう。幼児期にある子どもにとって、彼らが遊びと考えているものを、われわれ大人はそれを遊びと思うことができないこともあるかもしれない。つまり、未だ遊びには、未知なる部分がある。しかし、1つだけ確かなことは、幼児期の子どもにとって遊びは生活そのものであり、楽しい活動である。そして、われわれ大人たちも一緒に遊ぶことで楽しさを共感できることである。遊びは、人間が生きていく日々の営みの中で必要不可欠なものである。病に苦しむ子どもたちに楽しさを与え苦痛を取り除くこと、それはすなわち遊びを十分に与えることであり、遊びを保証することである。このことは、いかなる状況においても看護師が守っていかなくてはならないのである。

本研究の限界と今後の課題としては、まず「質的研究」の調査では、対象者や調査内容が限定され、結果の考察を一般化するまでに高めることが困難であった。具体的には、病院での実施調査では1つの病院における調査であったため、事例の固有性によるデータの偏りならびに限定された点は否めない。たとえば小児がんなどで終末期にある入院児や大きな手術前後の入院児などのデータはない状況での調査であったことなどである。また、看護学生への調査についても、看護学科については2校のみの教育機関で調査したものであるため、固有性の影響は否めない。加えて、大学、短期大学、専門学校といった養成機関別の検討もできなかった点も課題である。次に、「量的研究」の調査においても、対象者が限定されることから十分なサンプル数を収集できなかったことが課題である。さらに、質問紙についても、1つ1つの遊びごとに質問項目を設定した調査については、予備調査

等の手続きを踏んで質問紙を作成したが、さらに項目数を厳選するなどの整理を含めて再考する必要がある。最後に、入院児への遊びを保証し、児が望む遊びを誰もが享受できることは、もちろんその入院児ひとりひとりの QOL を高め、苦痛の除去につながるものである。しかし、入院児への遊びの効果をもっと広義に捉えて、調査を行うことも必要であったと考えられる。たとえば、看護師が遊びの援助をすることによって、入院児の在院日数が減少した、または投薬量が減少した、さらには看護師の勤務時間が減少したなどの結果を導くような調査を行うことができれば、入院児への遊びに関する研究の重要性を社会に広く示すことに繋がるであろう。このように、入院児への遊びの援助に関する研究は、入院児のベッドサイドでの事柄から、看護教育、さらには社会経済に関わるまで、狭義または広義に至る研究の意義がある。本論文の知見をひとつの礎として、これからも研究を積み重ねていきたい。

【引用文献】

- 安藤節子・森下史朗・大豆生田啓 (2009). よくわかる保育原理 第2版 ミネルヴァ書房
- Avila, M. L, German, G., Paris, M. M., & Herrera, J. F. (2004). Toys in a pediatric hospital: Are they a bacterial source? *American Journal of Infection Control*, **32**, 287-290.
- Bossier, E. (1994). Stress appraisal of hospitalized school-age children. *Children's Health Care*, **23**, 33-49.
- Caillouis, R. (1958). *Les jeux et les homes*. Paris: Gallimard.
(清水幾太郎・霧生和夫 (訳) (1970). 遊びと人間 岩波書店)
- 蝦名美智子 (2006). わが国のプレパレーションの状況 小児看護 **29**, 551-552.
- 江本リナ (2009). 病院における保育を巡る現状と課題 小児看護 **32**, 1020-1023.
- European Association for Children in Hospital (2002). The EACH Charter <<http://www.each-for-sick-children.org/each-charter.html>> (2012年3月1日)
- 福留輝美・米沢礼子 (1993). スピードトラック牽引により体動制限された学童への援助 小児看護, **16**, 1511-1513.
- Frankenfield, P. (1996). The power of humor and play as nursing interventions for a child with cancer: A Case Report. *Journal of Pediatric Oncology Nursing*, **13**, 15-20.
- Gillis, A. J. (1989). The effect of play on immobilized children in hospital, *International Journal of Nursing Studies*. **26**, 261-269.
- Haiat, H., Bar, G., & Shochat, M. (2003). The World of the Child: A World of Play Even in the Hospital. *Journal of Pediatric Nursing*, **18**, 209-214.
- Hart, R., Mather, P. L., & Slack, J. F. (1992). *Therapeutic play Activities for Hospitalized Children*. St. Louis: Mosby Year Book
- 長谷川浩 (1980). 子どもと遊び, 看護技術, **25**, 147-155.
- Hendon, C., & Bohon, L. (2008). Hospitalized children's mood differences during play and music therapy. *Child: Care, Health & Development*, **34**, 141-144.
- 東山明・名賀三希子 (2005). 教育・保育実習実技ガイド ひかりのくに
- 廣末ゆか (1999). 入院中の遊びの必要性 小児看護, **22**, 430-433.
- 帆足英一 (2009). 医療保育士の現状 小児看護, **32**, 1030-1035.
- 保育法令研究会 (2008). 保育所運営ハンドブック (平成21年度版) 中央法規
- Hockenberry, M. J., Wilson D, & Winkelstein, M. L. (2005). *Wong's essentials of pediatric nursing*. Seven edition. St. Louis: Elsevier Mosby.
- 本郷一夫 (2004). 子どもにとっての遊びと成長・発達 小児看護, **27**, 298-302.
- 堀田法子・松本由紀江・河合洋子・田淵タカ子・坂本土代 (1995). 幼児期の発達段階における遊び行動の比較 ―病児と健常児を比較して― 日本看護学会論文集―小児看護

- ー, **26**, 136-138.
- Houston, M. S. (1996). Care of the school-aged child in 90/90 traction, *Orthopaedic Nursing*, **15**, 57-62.
- Huizinga, J. (1955). *Homo ludens*. Boston: Beacon Press.
- (里見元一郎(訳)(1989). *ホモ・ルーデンス* 河出書房新社)
- 兵田直子・小田慈 (2011). 入院中の子どもの遊びにおける看護師と患者家族の認識と現状 小児保健研究, **70**, 343-349.
- 市原香波・佐々木有紀子・玉川百里・上野由美子 (2004). 遊びと保育を通してみた入院児の成長・発達 小児看護, **27**, 265-275.
- 飯村直子 (2009). 看護師と保育士の協働に関する両者の意識の現状 小児看護, **32**, 1024-1029.
- 今井澄子・佐藤明子・渡部明子 (1999). 病児の遊びと生活を考える会編 入院児のための遊びとおもちゃ 中央法規出版
- 井上絵未 (2008). 他職種チームの中でのチャイルド・ライフ・スペシャリストー他職種が
いかに連携・協働していくかー 小児看護, **31**, 1232-1237.
- 石崎優子・小林正夫・沖潤一・長尾雅悦・田澤雄作・星加明德・山崎嘉久・西間三馨・橋本俊顕・渡辺久子・古川漸・山野恒一 (2008). 日本小児科学会学校保健・心の問題委員会 入院中の患児・家族を支援するシステムに関する二次調査 平成 19 年度アンケート調査 入院患児の心の問題の発見 日本小児科学会雑誌, **112**, 556-562.
- 伊藤美佐子 (2004). 手術などで一時的に手や足が不自由になった子どもの遊びの工夫, 小児看護, **27**, 324-328.
- 伊藤龍子 (2007). 小児患者に要する看護時間と適正人員配置に関する研究 小児保健研究, **66**, 797-802.
- 岩崎テル子 (2005). 標準作業療法学 専門分野 作業療法学概論 医学書院
- 川口敦 (2012). 多職種のチームで取り組む小児の終末期医療 *INTENSIVIST*, **4**, 113-120.
- 菊池秀範・石井美晴・原敏子 (1999). 新保育内容シリーズ 改訂 子どもと健康 萌文書林
- 岸本光夫 (2009). 最近の小児リハビリテーション コメディカルスタッフの役割 作業療法士 小児科診療, **72**, 1501-1506.
- 金城やす子 (2007). 小児がん患児に対する日常生活支援及び遊びに関する看護師の認識 小児がん看護, **2**, 49-60.
- 北林外美栄・吉本瑞穂・森谷広美・北野利佳・五十嵐和子・松田敏恵 (1995). 組織的な遊びを介して得た遊びの効果ー室内安静を強いられる児への働きかけー 日本看護学会論文集ー小児看護ー, **26**, 139-141.
- 北島靖子・小野敏子 (1997). 小児病棟における遊びに関する実態調査ー自由記載項目の検討ー 順天堂医療短期大学紀要, **8**, 89-98.
- 厚生労働省 (2009). 平成 20 年患者調査の概況, 推計入院患者数 <

- <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/08/index.html>> (2012年3月1日)
- 小嶋謙四郎 (1971). 小児看護心理学 医学書院
- Krebel, M., Clayton, C., & Graham C.(1996).Child life programs in the pediatric emergency department. *Pediatric Emergency Care*. **12**, 13-5.
- 松平千佳 (2010). ホスピタル・プレイ入門 —Hospital Play Specialist という仕事— 建帛社
- 松森直美・鴨下加代・中村幸子・住田七瀬・中島由美子 (2006). 臨床における看護師の連携；実践の導入と普及 小児看護, **29**, 584-592.
- 松尾美智子・江本リナ・秋山真里江・飯村直子・西田志穂・筒井真優美 (2008). 子どもが入院する病棟の看護師と保育士との連携に関する文献検討—現状と課題— 日本小児看護学会誌, **17**, 58-64.
- 松尾宣武・濱中喜代 (2006). 新体系看護学全書第30巻小児看護学①小児看護学概論 小児保健 第2版 メヂカルフレンド社
- 三村保子・原孝成 (2004). 看護師の持つ医療保育士のイメージと医療保育制度に対する意識との関連 医療と保育, **3**, 67-75.
- 峰由貴・日野明子・兼板初名 (2003). 総合病院の小児科病棟における遊びの実際 日本看護学会論文集—小児看護—, **34**, 133-135.
- Moore, M., & Russ, S. (2006). Pretend play as a resource for children: implications for pediatricians and health professionals. *Journal of Developmental Behavior Pediatrics*. **27**, 37-48.
- 村田恵子・高島孝之・片田範子 (1997). 運動規制を受けた小児患者のストレス認知 コーピング行動と看護ケアとの関連性 神戸大学医学部保健学科紀要, **13**, 35-44.
- 無藤隆・外山紀子・藤崎眞知代・高橋たまき・小川博久・村田光二 (1991). 新・児童心理学講座第11巻 子どもの遊びと生活 金子書房
- 中田夕子・扇原益美 (2000). 化学療法が精神的ストレスをもたらした児への関わり—遊びの工夫を通して— 日本看護学会論文集-小児看護-, **30**, 42-44.
- 三谷奈々・渡辺仁美・唐木麻悠子・坂本留美・池辺友紀・澄川葵 (2001). 藤本小児病院における保育士の活動 小児看護, **24**, 1710-1716.
- 中久喜町子・加藤和子・竹村真理・岡本恵里 (1997). 小児看護における「遊びの研究」の変遷 1970年代から1996年までの「遊び」の定着化過程 看護研究, **30**, 517-528.
- 中村敦子・鈴木敦子・檜木野裕美・鎌田佳奈美 (2000). 入院している子どもの遊びに対する看護職の認識—看護経験年数による比較— 大阪大学看護学雑誌, **6**, 12-23.
- 中野綾美 (2010). ナーシング・グラフィカ小児看護学-小児の発達と看護
メディカ出版
- 中沢和子 (2000). 新保育内容シリーズ 改訂 子どもと環境 萌文書林
- 檜木野裕美 (1999). 日本の遊びをめぐる環境の実態 小児看護, **22**, 445-449.

- 檜木野裕美 (2004). 遊びのパートナーシップー関連職種との協働ー 小児看護, **27**, 308-312.
- 奈良間美穂 (2007). 系統看護学講座専門 22 小児看護学 1 第 11 版 医学書院
- 二瓶健次 (1999). 病院における遊び、おもちゃの意義 病児の遊びと生活を考える会編 入院児のための遊びとおもちゃ 中央法規出版
- 西元勝子 (1993). 入院時の遊びと看護, 医学書院
- 野村みどり (1999). 遊びの環境づくりのポイント 小児看護, **22**, 455-458.
- 尾花由美子 (1999). 混合病棟における小児看護の実践; その問題点と将来展望, 小児看護, **22**, 1307-1310.
- 及川郁子 (2004). 病気や入院による遊びへの影響とケアの考え方 小児看護, **27**, 304-307.
- 岡田洋子・荃津智子・井上由紀子・草薙美穂 (2010). 小児看護学 1 小児と家族への系統的アプローチ 第 2 版 医歯薬出版
- 岡田洋子・荃津智子・佐藤雅子・井上由紀子・菅野予史季 (2001). 小児看護学 2 小児の主要症状とケア技術 医歯薬出版
- 小笠原道雄 (2000). フレーベル 人と思想 64 清水書院
- Piaget, J. (1945). *La Formation de Symble chez L'enfant*. Paris: Delachaux & Niestle.
(大伴茂訳, 『遊びの心理学』, 黎明書房, 1988)
- 斉藤淑子・坂上和子 (2004). 病院で子どもが輝いた日 増補改訂版 あけび書房
- 沢本弘子・松山美枝子・長塚有子・杉山弥生・四村京子 (1998). 静脈内持続点滴中の児の遊びの工夫 日本看護学会論文集ー小児看護ー, **19**, 175-177.
- Seja, A. L. & Russ, S. W. (1999). Children's fantasy play and emotional understanding. *Journal of clinical child psychology*, **28**, 269-277.
- 白川公子 (1999). 病児にとっての遊び 病児の遊びと生活を考える会編 入院児のための遊びとおもちゃ 中央法規出版
- Stagnitti, K. (2003). A review of play and play assessments used in occupational therapy, 作業療法, **22**, 267-279.
- 杉藤徹志 (2003). 入院児の遊びを援助する専門職員の配置について 小児保健研究, **62**, 224-226.
- 鈴木敦子 (1999). 入院している子どもの遊びに対するイギリスにおける考え方とその現状 小児看護, **22**, 440-444.
- Sylva, K. (1993). Play in hospital: Why and when it's effective. *Current Paediatrics*, **3**, 247-249.
- 高橋衣 (2006). 小児看護実践の中に「遊び」を取り入れる必要性を理解するための授業の工夫とその検討ー小児病棟実習での「遊び」を取り入れた援助との比較からー 足利短期大学研究紀要, **26**, 103-111.
- 高橋みゆき・小野澤源・鹿島房子・伊藤直子・平真由美・加藤ゆみえ・林典子・大平美紀・

- 豊田江利子・小野鈴奈 (2007). 医療現場における保育教材としての絵本 (1) -病気に関する絵本の内容分析とデータベース化に向けての基礎研究-, 医療と保育, **6**, 8-15.
- 高橋亮・長田久雄 (2010). 看護学生の考える大腿骨骨折による牽引療法中の幼児に対する「遊び」の援助, 整形外科看護, **15**, 89-93.
- 高橋亮・長田久雄 (2010). 看護学生と保育学生における牽引療法中の入院児への「遊び」に対する着想の比較, 日本看護学教育学会誌, **19**, 9-18.
- 高橋亮・長田久雄 (2010). 入院児に対して行われている小児病棟看護師による遊びの援助の現状, 小児保健研究, **69**, 534-543.
- 高橋由紀子・鈴木真由美・牧ゆかり (2002). 緊急入院した子供への遊びの援助-情緒ストレス反応を評価して- 日本看護学会論文集-小児看護-, **32**, 77-79.
- 高嶋能文・山本和子・大橋祐子・高田早苗・今村貴子・岡田直樹・奈良妙美・堀越泰雄・三間屋純一・佐藤衣里・鶴橋明美・小野久美子・小山智広・赤池里佳 (2007). 血液・腫瘍疾患をもつ子どもの療養環境を整える 医療と保育, **6**, 16-21.
- 田中千代 (1992). 静脈内持続点滴中の小児の遊びと移動時のケア 小児看護, **15**, 1090-1093.
- 田中恭子 (2006). 小児医療現場で使えるプレパレーションガイドブック 日総研出版
- 田中恭子・南風原明子・今紀子・根岸佳慧・吉川尚美・佐藤弥生・清水俊明・山城雄一郎 (2007). 小児の療養環境における遊び・プレパレーション・その専門家の導入についての検討 小児保健研究, **66**, 61-67.
- 谷川弘治・駒松仁子・松浦和代・夏路瑞穂 (編) (2004). 病気の子どもの心理社会的支援 入門-医療保育・病弱教育・医療ソーシャルワーク・心理臨床を学ぶ人に- ナカニシヤ出版
- 谷川弘治・夏路瑞穂・小野正子・松浦和代・根ヶ山俊介 (2004). 子どもたちに提供する遊びのあれこれ 小児看護, **27**, 333-340.
- 谷村雅子 (2003). 小児看護に時間と人員を要する実態の検証 医学のあゆみ, **206**, 719-722.
- 徳井和江 (2009). 保育原理 第7版 <現代の保育学4> ミネルヴァ書房
- 徳井和江・福岡貞子 (2008). 現代の保育学6 保育実習教育実習 第5版 ミネルヴァ書房
- 鳥巢岳彦・国分正一 (2005). 標準整形外科 第9版 医学書院
- 辻吉隆・今井正次・永野陽子・土田亜紀 (1997). 小児病棟における遊び・学習の領域特性 -小児病棟の生活空間の計画に関する研究 その4-, 1997年度日本建築学会大会学術講演集, 183-184.
- 上田礼子 (2006). 幼児期. 平山宗宏 (編) 小児保健 第10版 日本小児医事出版
- 渡辺英則・森下史朗・大豆生田啓友 (2009). よくわかる保育原理 第2版 ミネルヴァ書房
- Weller, B. F. (1980). *Helping Sick children Play*. London: Cassell.
- (鈴木敦子・山中久美子・藤井真里子・檜木野裕美・吉田智子(訳)(1988).病める子どもの遊びと看護 医学書院)

- William, L. H., Lopez, V., & Lee, T. (2007). Effects of preoperative therapeutic play on outcomes of school-age children undergoing day surgery. *Research in Nursing & Health*, **30**, 320-332.
- Wilmot, M. (2007). The specialised play specialist. *Paediatric Nursing*, **10**, 33
- Wilson, J. M. (2006). American Academy of Pediatrics Child Life Council and Committee on Hospital Care, Child life services. *Pediatrics*. **118**, 1757-1763.
- Wilson, M., Megel, M. E., Enenbach, L. & Carlson, K. L. (2009) The voices of children: stories about hospitalization. *Journal of Pediatric Health Care*, **24**, 95-102.
- 山北奈央子・浅野みどり・三浦清世美・小林加奈・都築知香枝・石黒彩子 (2004). 入院中の子どもの遊びに対する看護師の認識と関わり - 病棟への保育士導入の有無を中心に - 日本看護医療学会雑誌, **6**, 33-42.
- 山元恵子・地蔵愛子・谷村雅子 (2004). 小児看護に時間と人員を要する理由 - 小児看護 24 時間タイムスタディー - 小児看護, **27**, 495-508.
- 山田敏 (1994). 遊び論研究 - 遊びを基礎とする幼児教育方法理論形成のための基礎的研究 -, 風間書房
- 山崎千裕・尾川瑞季・川崎友絵・山崎道一・郷間英世 (2004). 入院中の子どものストレスとその緩和のための援助についての研究 第 1 報 - 小児科病棟看護職員による心理的援助についての調査 - 小児保健研究, **63**, 495-500.
- Ziegler, D., & Prior, M. (1994). Preparation for surgery and adjustment to hospitalization. *Nursing Clinics of North America*, **19**, 655-669.